

村研究会大會記録

大 著 稿

有賀先生等より「九州くんからわざく来たのだから村研第一回大会の印象記を書かな」か」とのおとそじを頂いたので遠路はるばる組とう唯一の資格で一文を草することにしました。午前午後の研究發表については別途御紹介があると思いますので小生はそれ以外のことについて書いてみたいと思います。

先ず、今次大会の特色——同時に今後の村研の特色とするやしそうが——について述べてみたいと思います。第一にそれは農村研究の各領域の方々が一堂に会されたことでしょう。経済学者、社会学者、農学者を始め、実務にたずさわっておられる方々研究所の方々等々全く色々とりどりで村研の幅の広さを感じさせられました。総合討論会で、高倉氏、森住氏を中心として、有賀、木下、中村の諸先生を加えての論争の迫力は、その一例を物語つてあるといえましょ。

又、国際基督教大学の David E. Lindstrom 教授が早速かかって出席されたのも特筆すべきことでした。

特色の第一は、田舎の群がなかったことでしょう。それは村研の会員が、第一回大会で体験した学問的興奮と会員相互の親密な雰囲気を田舎の群という形式で抜き消す

たくなことに、潜在的終焉に陥るのではなく、上手に止むおどろく間に、容が形式の殻を破ったものであると感じています。

その第二は、懇親会に於て、細かいながら極めて長時間に亘って意見の交換や論争が終始、熱烈ともて、統計公私たる二十三時四十分の夜行で帰る都合上、少しうら腰を落ちつけてしまったことも勘定に入れねばなりませぬいか。其他色々あります。たゞ、以上の事柄から他の研究会、学会にみられない感るものを感じたところを述べたかったのです。兎角、學問的研究といつもの血の通よっていないものの代名語みたいに言われますが、村研の場合、何かほんのりしたヒヨマンライクなものを感じさせられました。土にまみれた所の百姓、と直結せねばならぬ農村の研究者にとって最も大切なのはヒヨマンライクな人間性ではないでしょうか。私は大会の雰囲気の中にそれを垣間見だすいたい印象をうけました。

最後のしめくくりとして研究上の困難について観見を用陳せねばならないに思いました。大部分の發表が実証調査に基く齊れた研究成果であったことは申すまでもあります。私は歩いて見たのだ——私のこの足が十分に試みたのだ」と云ふ或る一つの Open Road に收納される方途が未だ明確化され得ないからではないでしょうか。ホーリーマンの詩にある「おお行へ」の大道は私達の前にある——それは完全だ——私は歩いて見たのだ——私のこの足が十分に試みたのだ」と云ふ或る一つの Open Road の発見こそ村研に譲せられた最大の任務ではないでしょうか。

問題はその辺にあるような気がします。それは実証調査の困難性は逆説的に、や

Heberle's 「社會論」おこなうことでなかつたのやしないか。少くとも小出は区域研究が形式の殻を破したものであると感じます。

"Even regional research must necessarily be oriented towards general social theory and receive its direction from such theory if it is to arouse more than regional interest by contributing to the advancement of our understanding of social life in general." (Social Forces, October, 1946, 9, 9) «A Sociological Interpretation of Social Change in the South»)。来年度問題に置かれて、紙面の都合で省略致しました。

はり我々がとりあつかつてゐる仕事の地域
的時間的な制約の中に様だわっています。
私は村研の総合的力に対し、この困難性
をのりこえて Rudolf Heberle の主張す
るような（そして我々もつとに思ついて
いるような）一つの Open Road につな
がる立派なそして的確な研究成績を期待し
てやみません。（熊本頼大）